

表紙から

おもちゃが生き返る 感動を子どもたちに

今月の表紙の人は、故障したおもちゃを無料で修理するボランティアグループ「おもちゃクリニック」の代表、東本利男さん（68）です。

以前から太陽光発電など環境に優しいエネルギーに関する活動に取り組んでいた東本さんは、もともと、大のおもちゃ好き。おもちゃが生き返る感動を通じて、親子のふれあいづくりをしようと考えたのは、興味を生かして地域の人に喜んでもらいたかったからだそうです。仲間を集めておもちゃ修理の講習会を開くなど、昨年約半年間で準備を進め、今年の一月か



次々と持ち込まれるおもちゃに、ドクターは大忙し（5/23：丘珠ひばり児童会館）

ら区民センターで「診療」を始めました。また、五月には、丘珠ひばり児童会館で「臨時出張クリニック」を開設。わずか一時間半の間に三十点以上のおもちゃが持ち込まれ、大忙しとなりました。

メンバーは六十代の方を中心とした十三人で、その経歴も公務員、会社経営者、技術者など実にさまざまです。仕事中の真剣なまなざしや集中力は、まさに「職人」そのものの。初めて見るおもちゃの本来の姿、故障の原因をいち早く見極め、さまざまな工具を駆使し、手際よく治療していきます。

「愛着のあるおもちゃは、子どもにとつて世の中に二つとない宝物。お金では買えないんです。だから、直らないと思っても、あきらめないで持つてきてほしい」と話す東本さん。直った時に、感激のあまり泣き出した方もいたそうです。「出張診療もしたいのだけど、人手が足りなくて難しい」というクリニックは、毎週木曜日の午後、区民センターで診療中。これからますます忙しくなりそうです。



おもちゃの修理作業には、保護者の方も興味津々。こうして、地域の中で温かいふれあいの輪が広がっていきますね。

ひがすとりー

第28回

東区地名考(二)

東区の区域にはかつて札幌、苗穂、丘珠、雁来の四つの村がありました。一九〇二（明治三十五）年二級町村制が施行され四村は合併し、新たな札幌村となります。今月は、これらの村の地名の由来を紹介します。

苗穂

アイヌ語で小さな川を意味する「ナイ・ポ」が語源といわれています。かつては一帯に小川やメム（わき水）が多くあったようです。苗穂の開拓のくわが入ったのは一八七〇（明治三）年。この年が庚午の年だったので庚午一ノ村と呼ばれましたが、翌年苗穂村と改称されました。かつての苗穂村は、現在の伏古本町、札幌地区などを含む広い地域を有していました。

丘珠

アイヌ語の「オッカイ・タム・チャラパ（男が刀を落とした所）」が語源といわれていますが、意味は不明です。前段の「オッカイ・タム」に丘珠の漢字を当て、以前はオカタマと呼んでいたといえます。丘珠は、庚午の年の二番目に移



から農民が移って来た土地なので雁来と命名されたのではないかとはいわれています。

民が入植したので、庚午二ノ村と呼ばれますが、翌年丘珠村と改称されます。太平洋戦争後、札幌飛行場に米軍が進駐して、標識などを作ったとき、丘珠はすべてOK ADAMAとしました。そのため、次第に地元の人オカダマと呼ぶようになったといえます。

雁来

雁来の辺りは、アイヌ語で「ユクミンダラ（鹿の遊び場）」といわれていたそうです。地名の由来は火災のために枯木が多くあったためという説や、豊平川に渡り鳥の雁が来るからという説など諸説ありますが定かではありません。

雁来村の名は、一八七三（明治六）年に隣村の対雁から移転してきた農民が依然としてここも対雁と呼んだため、同年開拓使が改称させたものです。このため、対雁